宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311(代)
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園二―三一(〒812)
電話 福岡(〇九二)六五一―九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入(〒600)
電話 京都(〇七五)三四一―三三四一(代)~四番
三四三―三三四一番

いよいよ秋季大祭

神郡宗像の秋祭「田島放生会」間近

神郡宗像の仲秋を飾る当大社一大神事、秋季大祭の足音が聞こえてきた。

このお祭りは「田島放生会」とも称され、今より約七百年前に時の大宮司氏経が始めたといわれ、大漁満足、五穀豊穣と万民和楽を共々に喜び合う、宗像郡民あげてのお祭りである。

十月一日より三日間に亘る大祭は、海の一大ページェント「みあれ祭」で幕を開ける。

先導船を先頭に、沖・中両宮の御神璽を奉戴した御座船・供奉船等総勢約四百隻の大船団が、紅白の吹き流し、大漁旗を靡かせながら大島を出港、そして地ノ島沖から鐘崎沖を迂回し、辺津宮御神璽の待つ神湊港へと、玄界灘に幾条もの白い航跡を引いて神幸する海上絵巻は実に壮観で、往古の宗像水軍の再現ともいわれ、宗像漁民のこの海に生きる心意気を示すものであり、今では秋の風物詩として、当地方は勿論のこと、西日本一帯に知れ渡っている海上の祭典である。

又、大祭期間中には、主基地方風俗舞、喜多流翁舞、地元女子中学生による浦安舞、流鏑馬神事、南坊流瀧口社中による献茶祭等、各種の神賑行事が連日奉納されるほか、境内全域には約二百の露店が軒を連ね、三日間共多くの参拝者で大いに賑う。

秋季大祭を迎えるにあたり、先ずその初頭を飾る海洋神事（みあれ祭）打合せ会が、例年にも増して残暑の酷しい八月二十八日、郡内外九漁協の役員等多数出席の下、当大社養父宮司以下神職との熱心な審議がなされ、みあれ祭に奉仕する御座船も決定された。

更に九月十二日、警備、衛生、交通機関、消防等の関係諸機関との打合せがなされる四者会談が開催され、万全の体制を以って大祭が斎行されるよう申し合わされる。

間近に迫ってきた神郡宗像の秋を告げる大祭斎行の準備は、各方面に亘り着々と進んでいる。

古より生活の節目としてきたこの祭りを、神郡の人々は大切に想い、より厳粛に、より盛大にと関係者一同一致団結し、来たる秋季大祭に向けて前進している。

秋季大祭日程

九月三十日（日）	
午後五時	総社地主祭
午後六時	宵宮祭
十月一日（月）	
午前八時三十分	中津宮出御祭
午前九時	辺津宮出御祭
午前九時三十分	大島港出発（みあれ祭）
午前十時三十分	神湊港到着
午前十時五十分	頓宮祭（雨天中止）
午前十一時二十分	頓宮御発輦（陸上神幸）
午前十一時四十分	辺津宮入御祭（主基地方風俗舞）
十月二日（火）	
午前八時	流鏑馬神事
午前十一時	例大祭（氏子奉幣・翁舞）
午後二時	末社祭
十月三日（水）	
午前十一時	総社祭（浦安舞）
午前十一時四十分	高宮祭
	宗像護国神社秋季大祭
	第二・第三宮祭
午後二時	献茶祭（南坊流＝滝口宗孝社中）

大嘗祭と国体の復活

即位礼・大嘗祭の御大典の期日も五カ月後となった。しかしながら、即位礼を迎える奉祝の気分も、大嘗祭の日を待つ緊張感もあまり感じられないのはどうしたことであろうか。

国会では、相も変わらず、社・公・共の野党は、神道指令まるのみの教条的な政教分離を繰り返し、政府は、大嘗祭の本義を訴えるよりは、この祭儀に宗教色はない、政教分離の原則に反しないとして、質問攻撃の矢をそらすことに終始している。

○

一国の象徴が象徴であるためには、一般国民とは異なる人格、崇高なる精神、神性の保有が要請されよう。そのような性格は、いかなる国であれ、象徴であるからには不可欠のことであって、それを保有しないものは、名は象徴であっても真の象徴ではない。大嘗祭において天地神明を祭り神と一体の境地に立たれることは、崇高なる精神、神性を保有すべく斎戒されることで、まさに象徴が象徴たるための象徴的儀式といってよかろう。

日本国憲法第一条には、天皇は日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であると明記されている。第一条はすべての条項に優先し、すべての条項を覆うものである。象徴が象徴たるためには、大嘗祭は必要不可欠の最高の通過儀礼といってよい。これに類似した象徴たるための儀式は英国の戴冠式などにみられるが、ただ日本の儀礼が比類のない最高の厳粛さを有するのは、日本の国体によるものである。

真床覆衾の秘儀があろうとなかろうと、大嘗祭の本義は天皇が神と一体になられることである。神と一体の境地に立たれることである。「国家・国民のために安寧と五穀豊穣などを祈念される儀式である」（大嘗祭の政府見解）とは言うまでもないが、このことを抜きにしては大嘗祭の本義を語ることはできない。従って、天皇が神と一体になられるということを徒に避けることは、大嘗祭の意義を稀薄ならしめるばかりでなく、象徴の意義をも稀薄ならしめる恐れなしとしない。

○

大嘗祭への高まりを閉ざしているものに、斎田の所在の公表されないことがある。早く斎田點定の儀が行われて、悠紀の地方に秋田県、主基の地方には大分県が選ばれたが、斎田がどこに定められたか未だに公表されない。いうまでもなく大嘗祭の中心の儀は、神膳の供進と共食儀礼である。その料となる新穀を生産すべき斎田の所在が明らかにされないことは、大嘗祭への国民の関心を閉ざすことにならないか。斎田は悠紀主基、地方を上げて、いや国を挙げて斎わるべきものである。公表されない理由は警備上の問題とされているが、それは理由にならない。

数々の憂慮すべき問題を抱えながらも、神社界をはじめ心ある国民は、平成の御大典を、大正・昭和に劣らぬ盛儀となるよう、不断の努力を続けている。庭積机代物の奉献を進める運動もその一つである。また、奉祝のシンボルとして皇居前広場に「標の山」を復活させようという動きも起こっている。即位礼・大嘗祭の意義を知らせる啓蒙活動も進められている。

しかし、そのような熱意があるにもかかわらず、国民全体に御大典への高まりがみられないのはどうしてであろうか。それは、御大典を受け止める心理的基盤が十分でないということである。結論的に言うならば、日本の国体についての自覚が乏しいということである。万世一系の天皇が君臨され、君民一体となって、この国土を高天原（道義的理想国）となすことを使命とする国、これが日本の国体である。時々の政体は変わっても、この国体は永久に不変であるべきである。大嘗祭は、天皇が神と一体になられることによって、この国体を継承される聖なる儀式である。さればこの国体についての自覚がなければ、大嘗祭の意義を深く受けとめることはできない。

○

国体という言葉が忘却されてよりすでに久しい。終戦の御詔勅に明記された国体護持ということも、戦後四十年の歳月の中に風化してしまった。残念ながらこれが日本の現実である。大嘗祭への国民の関心もこのことと無関係ではない。御大典奉祝の運動を進めるに当たっても、このことを忘れてはならない。

神社新報より

余滴

今年の夏は記録的な猛暑となった。

宗像では七月九日降雨以来、八月下旬迄雨らしい雨は降らなかった。豊前地方では稲穂が枯れた水田があったらしいが、太古より豊葦原瑞穂国と称えられた我国も、近年の減反政策の為か、雨乞いの祈りを捧げたとはついぞきかなかった。

クーラを嫌う我家の山の神から逃げる様にして沖津宮奉仕となった。お盆を沖ノ島で過ごすのは十年振りの事、静かな時間を島まもりでと思いきや、一昨年設置された前面の消波堤防に太公望がわんさかとお訪れた。お盆は殺生をさけて先祖の霊を迎える厳粛な儀式、心静かに〝みたま〟と語り合う日本古来の営みは消滅しつつあるのか、当方が古いのか。

八月十五日は終戦記念日。戦争を知らない世代にとって大東亜戦争は遠い昔の出来事の様に思いがちだが、この時期は考えさせられる。毎年戦争実録や、怪談物語りがテレビ番組を占めるが、この夏はオカルトが陰をひそめ、専ら戦争番組が多かった様に思う。

八月十日に、終戦四十五年ドラマスペシャルとして「戦艦大和」が放映された。世界最大かつ最強といわれた不沈戦艦大和の壮絶な終焉までの六十時間、散華の世代と呼ばれた若い乗組員たち、彼らが抱きつづけた思いは今の日本に何を残したのか、極限の中に生きた男たちの壮烈なドキュメントドラマを、市川崑監督が見事に描き出した。

第三五一回 宗像大社歌会詠草

中村吾郎 選

毎月末日〆切

八幡東 江口 妙子
馬鈴薯の収穫終へし夜更けにて雨降るらしき音を聞きをり
（評）沈潜した発想が読む者の胸を静に撫でる。言葉も適切で、推量の「らしき」に情感が篭る。

八幡東 大塩ミヤ子
暁の梵鐘きこゆ恙なく朝餉の支度する身よろこぶ
（評）朝々に聴くひびきであろう、その鐘の音と付き合いがあるような処があり、一読して爽やかだ。

鐘崎 安永 久子
炎天下汗たらしつつ配達を終えたり四十年の我の商ひ
（評）実生活の歌は躍動する。ふと立ち止まり、己が四十年の歩みを顧みての想いが言外にある。内容豊か。

田熊 鷲頭かつ代
夜もすがら鳴く牛蛙どぶ川に繁るま菰の陰にひそみて

香椎 桜井 ツ子
楠若葉盛りあがる上を巡りゐる神苑の鳩ときに煌めく

田熊 力丸 一郎
終戦の玉音聞きしは糸島の駐屯兵舎に励みゐしとき

田久 立花 勇雄
亡き父が拓きし山の畑なれば老いたる今も吾は耕す

東郷 藤崎 辰子
日めくりの台紙に刷られて金いろの馬が吹き入る風に光りぬ

大島 目原 節子
裏山の朝草苅らむと鎌を研ぐ老夫（つま）は常よりはずみてみゆる

戸畑 田中ハツセ
放水は白煙となり舞い上る黒四ダムのはるかなる底

小倉北 松木 政子
果しなき砂漠に落ちん赤き日の反照浴みて砂丘にたつ

吉留 高山 信子
のぞみ薄き晩年なれど吾に一つヴイジョン湧きたり大切にせむ

武丸 中村さつき
此の町の子供神輿の可愛くて水をかけずにジュースを配る

八幡西 山田アヤ子
嬰児を抱く御姿雨にぬれ慈母観音は白く浮き立つ

福間 清原 絹代
鳴く蟬の声やうやくに弱りたる中にひぐらし一声透る

八幡西 川崎 ウラ
海岸に山と積まれし蛸壺の午後の陽反し眩しくひかる

小倉北 槇原 静子
夕日うけ帆の輝やけるサーフィンを時には沈むを案じて眺む

池田 小田 イセ
銅剣と管玉納まる甕棺に名のある人の面影を見る

河東 薄 かほる
鎮もりし社のかたへ老一人どくだみの根を掘り起こしをり

八幡東 岡本 初音
庭に咲く百合一輪を仏壇に供へて騒ぐ心安らぐ

吉留 白木うめの
眞夏日のやうやく暮れて山の上に赤き満月上りはじむる

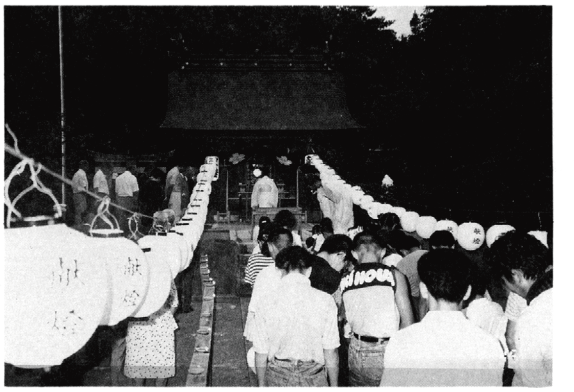
日の里 後藤 君代
新郎は柿の摘蕾にて日焼せりされど美男と媒酌のいふ

徳重 石松や寿子
窓透きてさし入る月の欠け行くを端居して見る夜の更くるまで

福間 二宮 末子
笹舟を流して走る幼子に母なる人か岸で手を振る

大島 屋形トミヱ
迎火を渚に焚きて亡き夫の短き一世を又恋ふ哀れ

宗像護国神社 戦没者慰霊祭斎行



夕暮れとはいいながら西日が射し、残暑なお厳しい八月十五日、宗像護国神社に於て、戦没者追悼慰霊祭併せて千灯明が厳粛に斎行された。

大東亜戦争終結後四十五年が過ぎ、戦争体験者が少なくなって来た今日、千灯明に参加した子供達の姿は今日の我が国の平和を象徴するかの如く、いつにも増して無邪気に感じられた。

当日早朝より田島地区育成会役員の奉仕により、二〇〇対の提灯と二〇〇基の灯明の飾り付け並びに境内清掃が行われた。

定刻午後七時、蟬しぐれの響き渡る夕闇の中、宗像市遺族会出光太蔵会長・郡遺族会縄田佐蔵会長以下遺族会々員並びに福岡県議会伊豆副議長・小山県議会議員・玄海町和田町長・同松井議長・田島区宗像区長・同育成会吉田会長以下役員と児童等約二〇〇名が参列し、当社山田禰宜を斎主に神職三名の奉仕により戦没慰霊祭が斎行され、国の礎としてその尊い命を散華された護国の英霊に対して、敬虔なる祈りが捧げられた。

祭典終了後、子供達に花火が手渡され、恐れながらも火をつけて楽しそうに興じる姿が印象的だった。花火大会、更には暑さを忘れさせるかのごとく鳴り響く太鼓の音に合わせて踊る、供養盆踊り大会も催され、夜遅くまで多いに賑った。

宗像護国神社には、西南の役より大東亜戦争迄に戦死された郡・市出身者、二千四百余柱の英霊がお祀りされている。私達はこの慰霊祭を通して、この方々の尊い犠牲があってこそ現在の豊かな日本があることを再認識すると共に、祖国の明るい未来を展望して命を捧げられた護国の英霊に敬意を表し、慰霊の誠と感謝の心を持ち続けなければならない。

閣僚の靖国神社参拝がこの時期いつも話題になるが、祖国のために尊い命を捧げられた英霊に、閣僚が国の代表として敬意を持って参拝するのは当然のことであろうし、我々には日本人として一人一人が、英霊の崇高なる精神に対して何をなすべきかよく考え、八月十五日の、そして戦没者慰霊祭の意義を子々孫々迄で受け継いでいかなければならないだろう。

平成の御大典記念 第二十回 西日本菊花大会 開催要項決定

西日本を代表する菊花の祭典であり、菊づくり九州一決定大会として、全国的に評価を得ている西日本菊花大会の開催要項が決定した。

同大会は、昭和四十六年に宗像大社遷宮祭を奉祝する神賑行事として、第一回大会が開催されてより二十周年を迎える。更に本年は今上陛下御即位の礼、大嘗祭も執り行われる記念すべき年にあたり、奉祝記念大会として充来よりも規模を拡大し、当大社神苑の特設会場で開催される。

本大会は、例年福岡県内はもとより佐賀・長崎・熊本を始め九州の代表的な菊花愛好家が、自信作を出品するが、本年は例年にも増して丹精込めた美事な菊花を出品し、この慶事の年の記念すべき大会を、意義あるものにしようと、出陳者は日夜努力している。

大会を主催する宗像大社菊花会では、一月、三月、七月、九月に各々総会、理事会、運営理事会、三役会、打合せ等の会合を重ね、去る九月九日当大社斎館にて理事会を開催、第二十回大会の大綱、開催要項、運営方法、出品花の調整等につき慎重に審議し、次のように最終決定された。

大会名称　第二十回西日本菊花大会
開催期間　十月三十一日～十一月二十三日
審査日　十月三十一日
表彰式　十一月十七日
設営　十月二十一日
搬入　十月二十八日
開催場所　宗像大社境内
主催者　宗像大社菊花会　代表者高田太助（会長）

審査規定　①予選審査、予選は各地各会を本会理事がまわり、予選審査を行い優秀なるものを本大会に出品させる。
②審査基準、※大輪、盆養（三〇点）花容・色彩（五〇点）調和（二十点）
※盆栽、盆養（五〇点）花容・色彩（二〇点）調和（三〇点）
※懸崖、盆養（三〇点）花容・色彩（五〇点）調和（二〇点）
③審査方法、審査員六名による採点、合議方式による比較審査で、最優秀賞、優等賞を決定する。

審査員
審査長　福岡県農業総合試験場園芸研究所々長　室園　正敏
審査員　同研究所花卉花木室長　小林　泰生
〃　同研究所研究員　近藤　英和
〃　同研究所技師　谷川　孝弘
〃　福岡県花卉専門技術員　中村　新一
〃　日本盆栽協会福岡支部長　藤本　鷹光

出品種目及出品点数
①大輪の部（十二鉢花壇）　七十点　八四〇鉢
②懸崖の部（三鉢花壇）　十四点　四十二鉢
③盆栽の部（五鉢花壇）　三十三点　一六五鉢
④特作の部　一二九点　一二〇〇鉢
⑤総　計　二四六点　三二四七鉢
擬賞点数
最優等賞　二十点
優等賞　九十一点
以上

海洋神事奉賛会 四者会談 開催

当大社神事の中でも最大の祭典である秋季大祭斎行にあたり、格別の協力・奉仕をいただく各機関並びに関係各位との打合せ会が行われた。

先ず八月二十八日（火）午前十一時より、当大社秋季大祭の幕開けを告げる海上神幸「みあれ祭」についての打合せ会が、河野沖・中両宮奉賛会長、宗岡海洋神事奉賛会長外十九名の出席のもと、当大社斎館に於て行われた。

今年の「みあれ祭」は今上陛下御大典を奉祝し、例年奉仕の宗像七浦六漁業協同組合所属の漁船に加えて、新たに波津・芦屋・相ノ島・新宮の各漁業協同組合所属の漁船も参加、総参加船四百余隻の大船団で盛大に斎行することを決定した。また奉仕者の方々は当大社で新調の揃いのハッピを着用し、全船一致協力してこの意義ある年の「みあれ祭」を奉仕するよう申し合わされ、船団編成、御座船、救難・報道・花火等の各船が決定された。なお「みあれ祭」に先立ち斎行される、沖津宮神璽迎えについては、九月十五日に斎行することを決定した。

次いで九月十二日（水）午前十時より、四者会談を開催、宗像警察署、宗像地区消防本部、玄海町消防団、土木事務所、保健所、西鉄、交通安全協会等の各関係機関と、三日間に亘り斎行される秋季大祭につき、期間中の警備・防火・周辺道路の交通規制等を協議。神社としては各関係機関の協力を得て、事故の無いよう万全の体制を以って臨む旨報告され、各者も協力する旨申し合わされた。

この打合せ会が終了すると、当大社も秋季大祭へ向けての諸準備に、いよいよ拍車がかかる。

―◇―◇―

沖津宮神璽迎え御座船
大島　第七宮地丸（17ｔ）　宮本　昭則
みあれ祭御座船
鐘崎　第十一新幸丸（17ｔ）　八尋　義幸
大島　伸洋丸（17ｔ）　宮本　昭男

出光興産㈱名古屋支店 潮見町宗像神社鎮座祭 併せて同名古屋ＬＰＧ充塡所 竣工奉告祭も斎行

伊勢湾を見渡す名古屋港の埋立地の一画、名古屋市港区汐見町の四〇〇〇坪の用地に、此の度最新の設備を備えた名古屋ＬＰＧ充塡所が竣工し、その敷地内に、潮見町宗像神社が建立された。

先頃、愛知油槽所が国の湾岸都市高速道路建設用地に提供され、閉鎖されたため、今まで同所の守護神として奉斎されてきた宗像大神も、一時御本社に還座されていたが、此の度汐見町に新に竣工した名古屋ＬＰＧ充塡所及五〇〇〇坪の用地の守護神として、再び宗像大神が奉斎されることとなったのである。

去る八月二十三日、当大社より太田権宮司以下神職二名が、宗像大神の御分霊を捧持し、空路名古屋へ出発。午後三時には無事到着し、直ちに充塡所事務所の仮殿に奉安した。

残暑厳しい中、御本殿洗清の儀・神殿祭等の諸儀が斎行され、灼熱の太陽が没し、名古屋湾に暗闇が訪れた午後八時より、太田権宮司以下二名の神職奉仕の下、出御祭引き続き鎮座祭が厳粛に斎行された。宗像大神の御神璽は、充塡所内の全ての灯りが消された浄闇の中、神職の発する「オーオー」という警蹕の声と供に出御され、粛々と参道を進まれ、滞り無く御本殿奥深く奉安鎮座された。

翌二十五日、立派に装飾された御社殿には、沢山の海川山野の神饌が奉献され、灼熱の太陽が照り輝く中、午前九時四十分より鎮座奉祝祭、引き続いて午前十時半より竣工奉告祭が厳粛盛大に斎行され、出光興産㈱名古屋支店長林史郎氏・充塡所運営店有限会社大村商店代表取締役大村茂雄氏を始め関係者多数参列の下、祝詞奏上に続いて、充塡所の最新装置である、ブタンストレージタンク・プロパンガス電子式定量自動充塡装置等の清め祓いが行われ、関係者が玉串を捧げて、業務の安全と発展を祈念された。

引き続いて、充塡装置の始動式が行われ、林支店長、大村社長により始動ボタンが押され、参列者一同、最新のＬＰＧ充塡所竣工を祝った。ここに汐見町宗像神社鎮座祭並名古屋充塡所の諸祭典が滞りなく斎行され、発展を続ける名古屋港の地に、永久に宗像大神が、出光興産㈱の守護神として鎮座されたのである。

一誌一話 (1) 遺跡の色々

楽　松　子

近年の考古学の発掘調査で出土した新しい遺物が、最近はニュース性も高く、世の中を大いに賑している。これらの多くの遺跡のうちで、福岡市吉武遺跡・鴻臚館址、奈良県藤ノ木古墳、佐賀県吉野ヶ里遺跡等、ここに上げた遺跡は特筆される。これらは考古学・古代史の研究者また愛好家だけでなく、一般の多くの人々の心を踊らせ、日本中を沸かせた遺跡である。

最近は狭い国土の開発に拍車が掛り、なほ一層の速さとなって天然自然の状態が遠くなり、人工色がより一層の強まりを増してきている。この状況の中での開発による人工都市化が、一〇〇年分を一気に押し進めて発進したようである。大仰に云えば日本の平野部はすでに、一〇〇パーセント身動き出来ないような姿を表現している。人間が住む生活圏が平野部から丘陵・山岳部へと駒を進め、坂を登りつめている。その為に新しい平らな土地を造成し続け、これに伴い数々の新しい発見をみてきている。いま日本人も自分が生活している所に対し、関心が一段と増してきたと考えられる。

戦後の日本を代表する考古学調査の中、九州での発掘を列記すると、福岡市板付遺跡、糸島郡前原町支登支石墓群、春日市須玖・岡本遺跡、日本考古学協会北西九州総合調査の島原半島調査、日仏合同調査唐津宇木汲田遺跡、飯塚市立岩遺跡など枚挙にいとまがない。なかでも特に注目された調査といえば、日本を代表し、古代史の重要な一面を担うとして関心を集めたのが、宗像大社の古代祭場である「沖ノ島祭祀遺跡」である。

九州での発掘調査で代表的な遺跡は、やはり土地柄からか、ほとんどが弥生文化を中心として発展してきた生活史の遺跡であることを注視しなければならない。早くから綜合調査が多く行われてきており、日本の考古学での発掘調査における基礎をも作り上げ、その技術的な基本ともされてきた。この様に九州は常に考古学会の先駆地であり、リーダーでもあった。

九州の考古学会の中心となって指導されてこられたのが、本年六月十一日急逝された故岡崎敬九州大学名誉教授である。先生は国内外の大きな調査をリードしてこられた。

なかでも、宗像大社復興期成会が結成され、「沖津宮古代祭祀遺跡学術調査」の第三次（昭和四十四年～四十六年）調査隊々長として調査研究を取り纏められてこられた。先生はわが国の東洋考古学の第一人者重鎮である。東西文化交渉の研究でシルクロードを通じた交流と、これにともなう古代宗像沖ノ島の果した役割を明確にされた。日本史の中に宗像が大きく位置づけられ、古代の国家大事業と沖ノ島祭祀が平行し執り行われていた実態を解明し、歴史の一頁に沖ノ島を記す基を作られたことは、大いなる偉業である。

ここに慎しんで哀悼の意を表しつつ、この偉業に感謝申し上げながら、先生の新たなシルクロードの旅路安かれとお祈りいたします。

宗像大社氏子会研修旅行

武蔵野御陵・多摩御陵等を参拝

宗像大社氏子会員の念願であった研修旅行が、九月十日～十三日の三泊四日の日程で、昭和天皇武蔵野御陵、大正天皇多摩御陵、明治神宮、靖国神社参拝等を主目的に、河野幸人会長以下三十二名の参加により実施された。

当大社氏子会にとって記念すべき第一回の研修旅行を企画するにあたり、昨年崩御遊ばされた昭和天皇をお偲びしての武蔵野御陵への参拝を希望する声が多く、併せて明治・大正天皇の御遺徳をも偲ぶ、関東方面への研修旅行となった。

研修旅行初日、参加者は当大社へ集合、午後二時出発、同四時日明西港よりフェリーに乗船、海路神戸六甲アイランド港へ向った。船中では弁当の夕食と各自持参の酒肴で談笑に花が咲き、消灯の同九時迄楽しい一刻を過ごした。

翌二日目、船は定刻午前七時港に接岸、全員元気に下船し迎えのバスに乗り替えた。バスは名神高速に入り東名高速を一路二日目の宿泊所箱根湯本温泉に向った。御殿場ＩＣで東名高速を降り、箱根芦ノ湖へ向う、この間四五〇㎞余を車中で過ごしたが、バスガイドの案内と参加者の問答等で、道中退屈することがなかった。当日は曇天とガスのため富士山を望むことが出来ず、十国峠での富士山眺望も中止となった。かわりに芦ノ湖、箱根関所跡の見学時間を延長、周辺の風景や旧街道の散策を行い、しばしの間江戸時代の世界に浸った。午後五時に湯本温泉のホテル南風荘に到着。一同箱根の名湯に入り旅の疲れを癒し、早速会食となった。

会食では河野会長の挨拶の後、同行神職が参加者の紹介を行い、倉元副会長の乾杯の音頭で宴会に移った。最初はお互に遠慮がちであったが、盃を重ねる内に余興も始まり、二時間の宴会が一時間もオーバーする程の盛会で、和気靄々の一刻を過ごした。

三日目はこの旅行の主目的である、武蔵野・多摩両御陵の参拝の日である。午前八時宿舎を出発、御殿場経由で山中湖へ向った。前日の曇空から一転して青空の広がった当日、冠雪の富士山も全容を現し間近で見るその姿は実に気高く、一同車の進行につれて左右、前後に顔を向け飽きることなく眺めていた。

道中スームースにバスは走り、予定より一時間程早く八王子市の御陵に到着。車中で衣服を正した一行は、神職の先導で列を整え、掃き清められた玉砂利の参道を参進、先ず昭和天皇の武蔵野御陵を参拝、白木の鳥居を潜り御前に整列、御遺徳を偲び黙禱を行った。一同は在りし日の陛下を追憶し、その場を去り難く感じる程の感銘を受けたが、次々と訪れる参拝者に押される如く御前を退出、大正天皇・貞明皇后の御陵を参拝、感慨無量の内に御陵を辞し、夕刻上野公園近くのホテルに到着した。

同夜の会食は食事だけとし、一同は思い思いに東京の夜を楽しんだ。

四日目は最終日。明治神宮、靖国神社、皇居参拝の日である。当日は曇後雷雨の予報で天候が心配された。一行は交通状況等も勘案して午前八時前にホテルを出発、明治神宮へ向った。神宮には予定よりも早く到着、受付けに参拝の意を告げると、早朝にもかかわらず神職・巫女の出迎えを受け控所へ案内された後、明治天皇・昭憲皇后の御神前での厳粛な昇殿参拝の栄に浴した。祭典終了後、別室にて湯茶の接遇を受け、祭儀部長渡邊武平禰宜より講話を賜り、一同感謝の内に退出した。

次に靖国神社へ参拝、同神社でも控室にて木山照道権宮司の講話を拝聴、大神鏡の鎮まる拝殿での昇殿参拝の栄を賜り、国家に殉じた英霊の神前へ玉串を捧げ、謹んで御魂の安らかならんことを祈ると共に感謝の誠を捧げ退出した。参拝後職員の案内により遊就館を見学、数々の遺品・遺書・遺影や当時の軍装品等を拝観した一同は、万感胸に迫るもがあり、平和の尊さを再認識すると共に、今日の幸福の有難さを痛切に感じたようであった。

靖国神社を出発する頃には雨が降り始め、皇居への道中では次第に雨足も強くなったため、車中より皇居を拝賀し、昼食後羽田へと向った。

羽田空港到着時には小降りとなったが、午後四時発の便を待つ間に突然雷鳴が響き豪雨となった。各航空機の離発着案内板は延期・未定の表示が点灯、福岡便も全く見透しのたたない状況となった。心配しながらロビーで待機している内に、約四十分遅れで搭乗が開始され羽田を離陸、約一時間遅れて無事福岡空港に着き解散、各自楽しかった旅路の思いを胸に家路についた。

本年初めて試みた今回の研修旅行であったが、参加された会員各位は市郡を問わず宗像大社の氏子として親睦を深めることが出来たのは、誠に意義深いものであった。来年以降はより充実した企画を立て、皆様方がこぞって参加出来るよう努力しますので、ご協力をよろしくお願いします。

宗像ユリックスでルオー展開催中

人類の苦悩、愛、そして希望

文化都市として着実にその歩みを確実なものとしている、宗像市の宗像ユリックス美術ギャラリーに於て、二十世紀を代表するフランスの宗教画家、ジョルジュ・ルオーの絵画展が開催されている。

芸術の秋を彩る同展には、ルオーのコレクターとしては世界一の、㈶出光美術館所蔵品の内より、フラピエの石版画と記念碑的銅版画集「ミセレーレ」、キリスト受難にまつわる連作油彩画「受難」、中期と晩年の油彩画などの代表作七十四点が展示されている。

会場内は、印象派や立体派とは趣きを異にした、荘重な雰囲気が漂い、鑑賞者を神秘的な光に包まれた透明な輝きを放つ、ルオー独得の世界に引き込んでいる。

今回の展覧会は、㈶出光美術館の創設者、故出光佐三氏が宗像市出身ということで実現したもので、全国で初めて館外の展覧会開催となった。一地方都市で世界の巨匠の絵画を鑑賞できるなど、またとない機会であり、「文化と学術の里」を目指す宗像市にとっても画期的なことである。是非ルオー芸術の神髄をじっくりと味わっていただきたい。

尚、同展は十月十日迄。

福間町上西郷に総合運動公園を建設

宗像郡福間町は、町民の福祉と生涯教育充実を目的に、「まちづくり対策事業」として、四年計画で造る総合運動公園の基本計画を発表した。

計画書によると、同町上西郷地区に敷地十五ヘクタールの広大な運動公園を建設、今年十月に着工、平成四年六月の完成予定である。総工費二十三億円。

主な施設は、一周四百メートル走路八コースの公式トラック、フィールド内はソフトボール、サッカー、ラグビーなどが出来る多目的グラウンドのほかに、両翼百メートル、中堅百二十メートルの夜間照明を備えた本格的野球場、テニスコート（七面）、ゲートボール場（二面）がある。また他の施設にはないアーチェリー場、弓道場、相撲場を設けたのも大きな特徴で、宗像地区随一の施設である。

これらの運動施設に合せて、散策のコース・緑の空間として、子供広場、池のある和風庭園、フラワー広場、創造の森などを設け、町民の憩いのスペースづくりに町としても力を入れている。

同町では、町民体育祭を始めとする町の行事だけでなく、周辺市町村にも解放し、宗像地区のスポーツの拠点としたい意向である。同公園は宗像地区でも本格的なスポーツ施設と家族連れなどの憩いの場を持つ有数の公園で、その完成が今から楽しみに待たれる。

福間総合運動公園基本計画図

釣川のイカダ上り大会

宗像大社東福間氏子会チーム　特別賞受賞

宗像郡市民の祭りとして親しまれている、「ふれ愛むなかたまつり」一連の行事として、七月二十九日（日）に開催された、第四回イカダ上り大会に、宗像大社東福間氏子会（会長大曲米二・会員二八〇名）チームが出場、釣川沿いの観衆から盛んな声援を受けていた。

このイカダ上り大会は、釣川浄化運動を目的に毎年開催されており、参加者は手作りのイカダで出場、スピード、アイデアを競う。

当日は宗像地区内外から十八チームが参加、釣川河口附近の皐月橋から砂山橋迄の約一㎞を、竹ざおや、かいを使ってさかのぼった。

今回初出場の東福間氏子会チームは、出場チーム中最高齢（平均年齢七十才）のチームで、釣川沿岸の風景を楽しむかのようにゴールを目指して、ユックリとさかのぼり、その健闘に対して特別賞を受賞した。

おりしもゴール地点の玄海町営グラウンドでは、宗像郡民体育大会が同グラウンドをメイン会場として開催されており、宗像大社東福間氏子会と染め抜いた幕に風を受けながら、額に必勝の鉢巻をしめ、白装束に身をかためて炎天下の中、必死にかいを漕ぐ同会チームのイカダには、沿岸の観衆からの声援もひときわ大きく感じられた。

社務日誌抄

八月一日　月次祭

八月二日　京都市便利堂吉見氏来社

八月三日　福岡国税局長塩田氏・香椎税務署長外二名参拝

神湊駐在所堀江修氏転任挨拶の為来社

八月五日　中津宮灯籠奉納式・大阪府福崎剛氏外参列

富山県立伏木高校教諭吉川正紀氏参拝

八月六日　国学院大学助教授椙山林継氏来社

宗像地区社会教育課文化財担当者十八名沖津宮参拝

八月七日　中津宮七夕祭

福岡県消費センター所長西坂義信氏・同消費生活課長大藪和子氏外三名来社

八月八日　梅光女子大教授財津永次氏来社

八月十五日　月次祭

宗像護国神社戦没者追悼慰霊祭・千灯明

職員会議

八月十七日　出光エンジニアリング㈱千葉事業所岩本一彦氏参拝

八月十八日　中津宮翼賛会との懇親ソフトボール大会

東京消防庁消防学校副校長加藤利助氏外参拝

八月二十一日　九電保安協会十八名境内並社務所安全点検等奉仕

八月二十三日　出光興産㈱名古屋支店潮見町宗像神社鎮座祭・太田権宮司外神職二名出向奉仕

八月二十四日　出光興産㈱名古屋支店潮見町宗像神社鎮座奉祝祭並同名古屋ＬＰＧ充填所竣工奉告祭・前記神職奉仕

八月二十五日　菊正宗酒造記念館名誉館長森太郎氏外一名来社

八月二十六日　㈱梅田建設代表取締役梅田工氏来社

八月二十八日　秋季大祭海洋神事打合せ会

八月二十九日　宗像大社菊花会役員会

八月三十日　島根県奇鹿神社宮司渡邊守人氏・同鹿足郡吉賀地区神社総代会九十名参拝

八月三十一日　航空自衛隊芦屋基地隊員三名参拝

宗像大社歌会 俳句作品集（三二）

若松　井手　清隆
新涼や滞空ながきグライダー

藤沢　井上　玄洋
千切れ雲空覆り初め秋立てり

福間　廣渡　一寿軒
鬼女のごとベロも真っ赤な密氷

福間　森　清
大小に揺れて綾なす花菖蒲

福岡中央　力丸　玄風
宿したる雨に色あり合歓の花

日の里　花田　いつ枝
梅漬けて主婦たる貌をとり戻す

津屋崎　西住　喜三郎
来ては去るトンボの空の青さかな

田熊　安部　ゆき
減塩の食事になれて西瓜食ぶ

福間　二宮　末子
芥屋の海釣りする人の眞夏(なつ)日和

名古屋　小田　留子
迎え火に亡き子の齢を数えけり

名古屋　小田　喜一
電柱の影ありがたき油照り

（続）浜の寄物 50

漂着物の奉納(一)

いしい　ただし

今年の夏は、日本中が異常な暑さに悲鳴をあげた。福岡は一ヶ月以上も熱帯夜が続いた。東京も雨が降らず、近々給水制限に入るという状態であった。その頃に私は東京へ行った。

八月四日・夜行列車で博多を出発、翌五日、十一時には炎熱地獄の東京着。東京駅から京葉線へ乗りかえて、目的の一つ千葉・幕張メッセへ。「大恐龍博」を観るためである。カナダ・アルバータ州から発掘された恐龍化石群の展示は、予想通りの迫力があった。その後、宿が渋谷であったため、学生時代に四年間を過ごした思い出の地を巡った。金王様、国大、永川神社そして羽沢町方面を。

翌日は、これも目的の東京都府中市に鎮座する大国(おおくに)魂(たま)神社へ。ここの宝物館に蔵されている、江戸時代に奉納されたアオイガイ（カイダコ）を観るたである。

駅を降りると、欅並木に圧倒された。うだるような暑さも、うっそうと繁る樹々にさえぎられて心地よい。ここの欅は古く源頼義、義家が戦勝御礼に苗千株を寄進したことに始まるという。江戸時代にも幕府の保護を受けている。この馬場大門欅並木は国の天然記念物に指定されている。

大国魂神社の由緒について、同社から発行されている栞から記しておこう。『大国魂神社は大国魂の大神を武蔵の国の国魂として御祀りした社であります。この大神は、出雲の大国主神と御同神で、往古武蔵国を開発されて、人民に衣食住の道を教えられ、又医療法や禁厭の術も授けられた御方で、俗に福神（大黒神）又は縁結びの神として著名な御方であらせられます。

当社の創立は、景行天皇四十一年五月五日で、当時は武蔵国造が代々神社に奉仕したが、大化改新によって、武蔵国府を此の地に置かれたので、国司が国造に代って奉仕するようになり、管内神社の祭典を行う便宜上、武蔵の国中の神社を一ヶ所に集めて配祀された。是が武蔵総社といわれる起源であります。なお左右の相殿に、国内著名の神社六所を合祀したので、六所宮と称せられるようになった。』六所宮とは（一の宮・小野大神、二の宮・小河大神、三の宮・氷川大神、四の宮・秩父大神、五の宮・金佐奈大神、六の宮・杉山大神の六大神で、または六所明神とも称される。

鎌倉時代以後、武家の篤い信仰を受けたが、徳川家康は神領地五百石を寄進している。社殿はたびたび兵火を受けて焼失。家康が江戸入城後の慶長十一年に造営、正保三年（一六四六）にも焼けたが、寛文七年（一六六七）三月将軍家綱の命を受けて久世大和守広之によって再建された。

例祭は五月五日の闇夜祭(くらやみ)（暗闇祭）が著名である。燈火を一切消し、闇夜のなかを八基の神輿が御渡したのでこの名がある。昭和三十六年より夕刻に改められた。他に五月二日の御鏡磨祭（おかがみすりまつり）や七月二十日の李子祭（すもももまつり）八月一日の相撲祭（すもうさい）等や、例祭諸神事が多くある。

境内には欅の老木が各所にあり古社の風格がある。閉められている。近寄って案内板を見ると、日祭日以外は閉館との事であった。

まずは参拝をして、社務所へ行き、見学の理由を告げると開館して下さることになった。一階は闇夜祭に使われる八基の豪華な神輿と、大太鼓が置かれている。二階は重要文化財及び宝物類が展示されている。狛犬一対（重文指定）は桧材で、寄木造り、漆塗り金箔仕上げのあとがある。高さ七十三センチ。運慶の作と伝えるものである。仏像本地仏五体、古鏡四面、古文書、刀剣類。そして久世大和守広之の寄進のアオイガイである。

（写真は大国魂神社）

まつりと生活（三十一）

鎮魂について

人間は肉体と霊魂から構成され、魂は生命活力の根源です。気や心は、目に見ることができませんが、だれでもその存在を認めています。「気心が知れている」「やる気がある」「気が合う」「心がやさしい」など、日常生活でよく使われる言葉ですが、実はこういう気や心のもっとも奥深いところにあるのが霊魂であり、これが人間の気や心に大きな影響を与えています。古来日本人が最も重視してきたのがこの生霊なのです。

人間の動作や思考を支配するのが大脳であるとすれば、人間の生命や活力を支配しているのが霊魂であるといえます。

神道は何より若々しい躍動する生命力を尊び礼賛します。そのために行います鎮魂は、禊祓と並ぶ神道の重要な行法です。鎮魂は、ミタマシズメ、ミタマフリともいい、枯渇する人間の魂を振り起こし、衰微する魂の生命力を再生するのです。

古代の日本人は、霊魂を「タマ」と呼び、生命の維持はタマの働きによって保たれ、死はタマの離脱することだと考えていたのです。

「魂振」は、魂を振り動かして、その霊威を高める働きです。

鎮魂祭は、人間の肉体から遊離しようとする魂をしっかり鎮めて固定し、魂振りをすることによって人間の生命力と活動力を強化すると考えた古代信仰から生まれた神事です。

冬至の頃は太陽や人間の生命力と活動力が衰える季節と考えられ、鎮魂祭を行ってそれを再生強化したのです。いわゆる生命復活の呪術儀礼であったのです。

鎮魂祭は、古代から宮中での践祚大嘗祭や毎年の新嘗祭の前夜に、天皇と皇后の御魂を鎮めるために必ず行われる祭祀です。

その祭儀は、榊を中心とした神籬の前に、御巫が宇気槽を伏せ、その上に立ち桙で槽の底を十度突く。この拍子に合わせながらさらに神祇官の一人が御魂緒の糸を十度結び葛の筥に納めます。最後に女官蔵人が御衣の筥を振り動かします。その際鎮魂歌が歌われます。今日でもこの鎮魂祭は宮中で行われています。

このように、鎮魂祭は、古代の日本人は、神や人や大地などの霊魂を振り動かすことによって、魂は霊威を増し生命力をよりよく強化できると信仰したのです。

又神輿を勇壮に振り動かす「神輿振り」も一種の魂振りの行為であると言えます。神輿を上下左右に振り動かしたり、走ったり、勇壮にかけ声をあげて、放り投げたり、暴れたりします。これは、神輿に乗っている神自身の魂振りであり、これによって神の霊威、生命力を高め、豊作豊漁、疫病退散がかなえかられると信仰したのです。

稲作農耕社会の日本では、古来大地を踏みならしたり打ったり、たたいたりなどして、大地になんらかの振動を与える行事を行ってきました。これによって大地に秘められた霊魂が魂振られて、生命力がいっそう強化されるのです。

このように、タマフリを行うことによって、神の清く、明るく、正しく、直きな霊の働きを自己の霊のうちに入れるのです。すなわち神の魂をこめることが鎮魂の目的です。その結果自分が知らず知らずのうちに犯した罪や穢れが清らかにぬぐい祓われ、気力、活力が甦ってくるのです。

つまりそれは、俗から聖、ケからハレへの転換をはかり、それによって我々は自己の神性をとり戻し、社会生活の意義を確めるのです。そこに鎮魂の意義があると言えます。

Y・S記

RKB文化セミナー

日本のこころを尋ねて むなかたの海辺と杜(もり)に（十五）

渡部　昇一

ところが、これもふと気が付いてみたら、日本は全然輸出は黒字は落ちない。内需は拡大するし、輸出は増えてはいけないけれども黒字はどんどん増すばかり。気が付いてみると値段にかかわらず、日本から買わなきゃならない機械がいっぱいあることがわかったということですね。それから日本のような天然資源の無い国は、やはり円の価値があったほうが得する面がべらぼうに多いわけです。鉄だって石油だってものすごく安く買えるわけですからね。石油なんか簡単に言えば、一頃の四分の一なわけです。ドルが半額になるでしょう、石油の取引はドルですから、ドルが半額になって、石油も半額になったんですからもう四分の一位になる。そうすればもう日本の企業が潤わない訳がない。というようなことで、ふと気が付いてみたら日本の円は、うんと強くなったのに景気はものすごくいいというようなことになったのです。

そして、その結果として何が生じたかというと、世界の金融界に於ける日本の地位の飛躍的向上です。世界の大銀行上位から何位迄なんていうのは、去年あたり迄は上位十行の内七行位は日本が入っていました。最近はもう十中十迄日本の銀行です。でここ迄になりますと、私は一つまあ安心なところもあるんです。それはなぜかと言いますと、ユダヤ人の話なんですけれども、ユダヤ人は国を失いまして二千年近くヨーロッパを始め、世界各地に住んで迫害ばかり受けておった。ところが文明国に於てはユダヤ人を迫害することは、だいぶ前から不可能になりました。ナチスを除いてですね。だからヒットラーは完全に皆につまはじきされたわけで、文明国に於てはそれはちょっと出来ない。なぜかというと、金融に非常に強く入ったからです。と、この金融に入るとユダヤ人さえも潰せなくなるということは、大変日本にとっては心強い一つの例ではないかと思います。

国の無いユダヤ人ですらも金融を握れば、これはなかなか潰せなくなった。少なくとも文明国では潰せなくなった。そうすると日本は、金融では今は最盛期のユダヤ人よりも強い。ロンドンに金融自由化で日本の証券会社等が進出したのは、わずか三・四年前です。しかし今年あたりは、ロンドンの全市場取引の三分の一は日本がやっております。東京株式市場に上場されている株式の総資産は、全ニューヨーク、ウォールストリートの全部、ロンドン、パリ、フランクフルト全部合わせたのとほぼ同じになりました。そうなると、これだけ金融が強くなるとですね、しかも産業は強いし、国もある。これはユダヤ人みたいに簡単に潰せなくなるんじゃないかというのが、まあ一つの希望でもあります。

それから、これからのことなんですけれども、考えてみましても本当に日本は、ちょうど世紀の真中でポシャッたわけですが、戦後日本が復興したためにどういうことが起ったかというと、それ迄はなんとかあきらめという状態だった有色人種の国が、やっぱり奮い起ったと思うのです。それは今の人はあまりわかりませんが、戦前の人種差別、これはすごい。なぜ日本はあんな馬鹿な戦争をしたんだとよく言われますが、今みたいな世の中であれば日本は絶対戦争をしませんよ。人種差別は無いでしょう、一応、それから自由貿易でしょう。全然戦争することないですよ。戦前は日本人は特別な差別を受けておった。アメリカにもね。そして自由貿易ではだんだんなくなって来た。そういうのがあったからというのが一番大きな理由であって、今みたいな世の中ならまあ戦争はなかった。そして今は人種差別が激しく行われておりますのは、南アフリカ連邦だけです。ところが戦前は世界中がほぼ南アフリカみたいだったのです。

一例をみますと、「ウィンズ・オブ・ウオー」という、ハーマー・ウォークというアメリカのベストセラー小説家がいまして、この人の書いた「戦争の嵐」、これは三巻本で翻訳されていますが、その続編に「ウオー・アンド・リメンバランス」という、「戦争と追憶」という同じ位の厚さの本があります。これは翻訳されていないようですが、この本は大体太平洋戦争の初めの頃から始まるんです。「戦争の嵐」の方は大体ヒットラーの頃から始まりまして、ずうっと続いているわけですが。その「戦争と追憶」の最初の方の情景があるんです。それは主人公が昭和十六年にシンガポールを訪ねるという情景です。

つづく